

# 序

## 「地球環境」の時代を 生きる君に

久保田 学

環境中間支援会議・北海道代表

Photograph by Manabu Kubota

1992年6月、ブラジルのリオ・デ・ジャネイロで「環境と開発に関する国連会議」が開かれました。「地球サミット」と称されるこの会議は、179カ国の首脳が参加した人類史上例のないハイレベルかつ大規模な環境会議でした。NGOや地方公共団体も多数参加してさまざまなイベントを開催し、当時12才のカナダの少女、セヴァン・スズキが「どうやって直すのか分からないものを壊し続けるのは、もうやめてください」と世界の指導者たちを諭したシーンは「伝説のスピーチ」として語り継がれています。

この地球サミットで、首脳たちは「持続可能」を目指すための「リオ宣言」と、40章からなる行動計画「アジェンダ21」に合意し、気候変動枠組み条約と生物多様性条約をスタートさせるなど、人類がそれまでの価値観を見直し、地球環境問題に真剣に向き合う歴史的転換点となりました。

それから20年経った今年6月、再びリオで「Rio + 20」(持続可能な開発に関する国連会議)が開かれ、1992年を上回る188カ国からNGOを含め4万4000人が参加しました。しかし、劇的な成果を上げた地球サミットに比べて、Rio+20は精彩を欠きました。国内でも、東日本大震災後の復興や原発事故処理、消費増税、TPPといった内政の混乱を前に、報道も低調で、世論も高まりませんでした。

とはいえ各国が人類の持続に向けて舵を切ったからの20年の間に、世界でも日本でも、たくさんの変化があり、挑戦や変革が行なわれてきました。そして、私たちの暮らす北海道の環境もまた、大きく変わりました。そこで、私たちは「Rio + 20」を節目に北海道の環境の変化と人の動きを振り返り、この20年間で独自の切り口で世の中に伝える「白書」をつくろうと考えました。

ところで「白書」とは何でしょう？ 政府は毎年『食料・農業・農村白書』『経済財政白書』『環境白書』『警察白書』など、たくさんの「白書」を発行しています。「白書」は、狭い意味では行政機関がそれぞれの担当分野ごとに世の中の状況を分析し、施

策の実施状況とともに国民に報告するものです。たとえば国の『環境白書』は、環境基本法に基づいて毎年度の「環境の状況」と「環境の保全に関する施策」を国会に報告するものです。同様に『北海道環境白書』は、北海道環境基本条例に基づき、北海道知事から道議会に提出される年次報告です。

これらは役所の報告文書ですから、公的な統計や政策概要などは網羅されていますが、無味乾燥な行政用語で記述され、執筆者の思いや意見が含まれることはありませんので、読み物としてあまり面白いものではありません。それでも、国の環境白書などは、冒頭の総説編で毎年テーマを設定して状況分析を行ない、社会に問題提起をしています。地方自治体の白書では、残念ながらこうした「特集記事」を組む例はまだ少数派です。本来、地域の独自性を競えるはずの自治体版白書にこそ、もっと「地域の主張」が見られてもいいように思います。

いっぽう、民間団体も自由な発想で「白書」を作っています。たとえば、宮城県の環境NGO「公益財団法人みやぎ・環境と暮らし・ネットワーク」は、かつて、独自の視点で地域の環境や対策を提案する『市民がつくるみやぎ環境白書』を発行して意見発信していました。全国各地の自治体で構成するユニークなNGO「環境自治体会議」は、2005年から毎年「環境自治体白書」を発行しています。

「人と組織と地球のための国際研究所」代表の川北秀人さんは社会のさまざまな分野について民間団体の立場で自由に調査し、「白書」という形で世の中に発信することを提唱しています。私たちが「北海道の環境」をテーマにオリジナルな切り口で発信する「白書」を作りたいと考えました。

地球サミットが開かれた1992年に生まれた人が今年成人します。地球サミットに前後して、日本では空前の好況を誇ったバブル景気が崩壊し、「失われた20年」に突入し、今に至ります。この間、環境と経済の統合は必ずしも進まず、ついには東京電力福島第一原発の事故により後世代におよぶ巨大な「負の遺産」を抱えてし

まいました。まさにそうした困難な時代に生まれ育ったみなさんにこの「白書」を読んでもらいたいと考えました。

「右肩上がり」の社会が遠い過去のものとなり、将来への不安感と閉塞感に社会全体が覆われるなか、次の20年に漕ぎ出す若い人たち。「世の中は変わらないだろう」と何となく思っている人も多いかも知れません。一方で、それでもこの北海道で、環境問題に関心を持ち、関わって行きたい、社会に貢献したいと考える人もいます。

この「白書」では、北海道の環境や人の変化を、データや分析ではなく、それぞれの分野の先駆者の言葉を介して伝えたいと思います。登場する12人はいずれも、北海道の自然や地域、生活環境の分野で創造的な仕事に挑戦し、新しい世界を切り拓いてきた第一人者たちです。一般の関心が高まるはるか以前からそれぞれのテーマに着目し、地道な研究や活動の末に、重要な発見や成果を遂げてきたパイオニアたち。彼らの「思い」を、現場のリアリティを織り交ぜてお伝えしたいと考えました。それはきっと、世代を超えて共通する困難な課題の解決、そしてみなさんの「思い」を実現するためのヒントに満ちていると思うからです。

世の中は動き続けています。半世紀ほど前、国策による国土開発や都市化、工業化のひずみが公害や自然破壊を生み、社会経済の成熟化、グローバル化により形を変えて進行し、やがて地球規模の問題として認識されるようになりました。本書の12人の活動もそうした現代史の流れのなかでのできごとであり、そこに刻んできた道筋はこれからの20年間の羅針盤にもなるはずです。

「世界は、きっと、変えられる」。2008年夏、「北海道洞爺湖サミットNGOフォーラム」が掲げたコピーです。「右肩上がり」であろうとなかろうと、いまから20年後に社会で重要な役割を担っているであろう「地球サミット世代」に、改めてこの言葉を贈りたいと思います。——それでは、先駆者たちの話を聞いてみましょう。

※本書は、道内で活躍する12の方々へのインタビューをもとに編集しました。  
文中の図表や写真は趣旨に合わせて事務局で挿入したものであり、文責は編集委員会にあります。